

宇野浩二の投稿作品 — 『秀才文壇』より —

田澤 基久 国語教育講座

(明治41年11月15日 8巻24号)

以下に紹介する宇野浩二の投稿作品は、彼がもつとも多くの作品を投稿した明治四二、三(一九〇九、一〇)年を中心に明治四〇(一九〇七)年から四五(大正元)(一九一二年)までの『秀才文壇』の調査によって判明したものである。(以下西暦年号を略す。)但し、調査対象とした日本近代文学館、天理図書館所蔵本に欠号が多く、未だ未見の作品が存在すると思われる。

1

明治四一年四月、宇野格次郎は天王寺中学五年生になった。その直後、五月に発行された天王寺中学校校友会雑誌『桃陰』三三号に小品「故郷」を発表している。これが現在判明している、宇野の最初に活字になった作品とされている。それに遅れること約半年、『秀才文壇』8巻24号(11月15日発行)初めての投稿作品が掲載された。矢部白雨選の「小品文」欄に入選した「就寝後」と、徳田秋声選の「短篇小説」欄に入選した「大工」の二篇がそれである。(以下本文は、明らかな誤植脱字等は補正し、検討を要するものには〈ママ〉を付した。原文総ルビのものはパラルビに改めた。)

就寝後

大阪市 はなもり

ぢり／＼と染み入る様に寒いので、蒲団を引つ被むると丁度時計が十二時を打つた。

「二時二時・六時と丁度六時間ある。」と思つて足をすくめて眼を閉る。

「早う卒業したいな」と云ふ様な感じが起る。卒業したら何会社へ入つて、月給をもらつて、あらゆる文学雑誌をとらう。と子供見たいな思想が浮ぶ。

「月に幾程入るだらう」等と計算して見る。

月給——と何だか物珍しう感じる。直美しい妻と云ふ様な感が起る

「早く娶よめいたいな」と思ふ。次から次へと取りとめのない空想に耽つて居るとチンと時計が零時三十分を報じた。

大工

大阪市 宇野 花守

勝公は弱い男である、意気地のない男である。

始めての人とか、気の張る人等と話す時は、向ひ合つて話して居ても、相手の人が幾度と聞き返して、終には聞えぬのも聞えた様な振する程、小さい声で語る。相手も迷惑なら、勝公も厭である。其度毎に胸を動悸どきどき々々さす。

こんな男に限つて、永年の知己と云つた様な朋輩とは極めて愉快に話すものだ。で勝公もそれだ、だから彼はよく知らぬ人は愛想のない男だと云ふが、所謂知己の朋輩は面白い男だと云ふ。が何方にしても温厚いと云ふ丈は一致して居る。

一寸事が起ると直胸を動悸どきどきつかす、時々頭梁に

「不可ぬ男だな、人間は度胆が太つかねえと不可んぜ」等と云はれると、

「何!」と彼でも矢張り反抗心はある。それでも顔を赤めて定つた様に

「ハ……」と笑ふ丈である。

「御公おれも」と其時思ふもの、直何か起ると胸を動悸どきどきつかす。彼は此頃それを隠さうと懸命に勉めて居る。女郎買は彼等仲間の唯一の慰安である。一日エサエサと働いて彼等は結局何が楽しみだらうね。と考へて見ると実に気の毒なものだ。

金子は貯りもせぬが、貯め様ともせぬ。起きて働らいて食つて寝て。と云ふ事は

実際彼等の事を云ふのだらう。

「何しに生れて来たのだらうとは」誰しも思ふ。

彼等は其無意な、単調な生活を厭とも思はぬ。が只一つ女郎買と云ふ最大快樂が

彼等を働して居る。

勝公はこれにも行かぬ。只の一度行つた事がある。然しそれは引つ張つて行かれたのだ。殆んど担いで行かれたのだ。それも其後決して行かなかつた。

勝公は女を解せぬ様な男じやない、否返つて女には深刻な思想を持つて居た。女

郎買は嫌ひじやない、まう行かぬのだ、恥づかしいのだ。実際彼は心の中で行き

度いな、行き度いなと始終思つて居る。

「二度一人行かうか知ら」と思ふ事もある。道迄出かけた事もある。其度に彼は胸を動悸つかして。

「矢つ張り止め様」と帰つて呉る。そんな時には気嫌が悪い。

家内は只二人、お母さんである。其お母さんに思ふ様当る。何日でも当たつてから済まぬと後悔する。一鉢が常から家人のよい男でない。

或夜朋輩に連れられて、義太夫を聞きに行つた。

「此所も女だと、今更分り切つた事を考へて胸を動悸つかした。

その日から彼の胸には口を歪め、眉を顰めて語つて居る義太夫の姿が、絶えず往來して居つた——女は竹本九三吉と云ふのである。

「勝公如何したんだ、消氣てるじやないか」

「ウーム、イヤ一寸気分が悪いんで」と云つた様な会話に彼は頃日応接して居る。

其後彼は一人で義太夫を聞きに行かふと思つて、表迄行つた事が二三度もある、其度に木戸の所に人が二三人も居つたり、入口に世話女が沢山居つたりして彼は何日も失望して帰る。終には痛い腹を切つて、朋輩と一所に行く。僅の一度だけ一人で居た事がある。

その次の日も割合に一人でも苦しいと覺つたから一人でブラブラ家を出た。家から席迄は三丁程しかない。で其表へ来て見ると、入口の襖が細目に開いて居るので、五六人もの人が立つて見て居る。チエツ「又かい」と彼は舌打して二三間通り過ぎたが其辺の電信棒の側で

「早く閉めて呉れ、ば好いが」と思つて待つて居たが未だ閉めぬのか、一向人が減りさうにもない、入り替わり立つて見て居る。

彼は一度徘徊して来ようと又スタスタ歩き出した。両側の賑かな様も一向眼に入らず、只無意識に歩いて居る中に千日前の終点迄来た。

終点に一軒劇場小屋がある。彼は無意識に其旗幟を見ると、〇〇〇〇丈へと筆太に書いて、下に竹本九三吉とある。

彼は例の動悸を早鐘の様に打たして、

「ウム、ウム」と二三度も読み返したが終には

「ア」と長い嘆息をして、元来た道を足早に歩き出した。時々

「乃公も俳優になろうか知ら」と思つた。

其夜は例に増して不機嫌に家へ帰つた。

家には誰か客が来て居る様である。彼は上へは上らずに厠へ行つて。そして此の

想を幾度か消さうと試みた。然し駄目で矢張り思ひ切れぬ。丁度七輪の火を、団扇で消さうと試る様なものであつた。

「温和なしい御子息ですな」と客は女である。

「はい温和なしい事は温和なしいですが」と母が云ふ

「花街に似合はぬ温和なしい御方で、まあ、貴女も御安心ですわ」と客は附加す。

彼は「馬鹿な、何を吐す!」と厠の中で冷かに笑つた。

(完)

前者には文学と恋に対する作者のあこがれを見て取る事ができよう。それは後年の宇野浩二の文学の《詩と恋》につながるものかどうか。

後者は、宇野自身の姿を主人公に投影した作品といえよう。《温和なしいご子息》であつた彼の中に秘められた女性への思い。千日前をさまよい、役者や女義太夫に思いを寄せているのは、当時、色町の真ん中にあつた宗右衛門町に住む、一七歳の宇野格次郎少年であつたろう。

2

明治四二年三月、第一一回生として天王寺中学を卒業。『桃陰』三五号(二月発行)には詩「ほのほ」、三六号(五月発行)には作文「自然の法則」(甲賞に当選)が掲載された。文学を志望したが容れられず、五月友人とともに代用教員を志して大阪府下中河内郡若江村の小学校に赴任した。しかし脚氣が重くなり一〇月に辞職。奈良県高市郡天満村大字根成柿に住んでいた母キャウと同居。一二月末には大阪へ戻る。

この年最初の入選作は小川未明選の「散文」欄に「秀逸」として九巻二号に掲載された「易者」である。

易者

大阪市 宇野 花守

今日も来た。

「医学専門学校の易者で御坐いますが、今晚は何か見る事はありませんか、見る事がありましたら御最負を願ひます、決して御世事は云はぬ易者で御坐います」と相変らず濁声で、今日で最早一年程も来る。雨が降つても槍が降つても必らず来る。

戸外は北風がビュー／＼吹いて、道行く人も殆んどいない。折々空車がガラ／＼と騒がしい音たて、通る。「運勢縁談失せ物、掛け合ひ事待人病気の善悪……」と、この風が何だと云つた風に喋つて居る。私は何だか社会を超越した大偉人の、言語を聞いて居る様な感じがする。易者は例の如く私の家の前で暫く停まつて、御披露をやつて居る。然し一向呼ぶ人もないらしい。

「ね、人間と云ふ者は「明日」と云ふものがあるのじゃ。今日はこんな嬉しい事があつた、こんなに運が向いて居る。なんて喜んで居つても「明日」と云ふ恐ろしい奴が大きな口を開いて待つて居る」と毎も御定りの文句を並べて居る。然し私は未だ何処の家も呼んで見て貰つて居るのを見た事がない。一年程の間同じ言を云つて、彼はかうして欠かさず来て居るのだ。こんな嵐しの寒い日でも。

「人間には慾や我慢と云ふものがある。——風が一頻り吹いて障子がガタ／＼鳴る。空車が二台程も続いて通る。彼は尚喋つて居る。

「同じ年同じ月に生れた人でも、善い人もあれば悪い人もある。——」段々調子が強くなる。電信棒がビュー／＼凄いに鳴るので彼の声は折々消される。

「うどーん」と夜鳴の聲が風の絶え間に咽ぶ様に聞える。

「決して御世事は云はぬ易者であります。何が見る事がありましたら……」と又初めから繰り返して居る。

私は火煙の中で考へた。一年も来るが未だにこの易者の顔を見た事がない。

「如何な顔をして居るのだらう」と思つた。毎日毎夜こんな日でも欠かさずに来るこの易者は、如何な男だらう。如何な氣質だらう。とも考へる表では相変わらず喋つて居る。いつもより長い。

「矢張り寒いだらう」始終パンに追はれてこんな日迄商売に来るのだ。それでも冷たい情のない人間は別に可愛相だとも思はず、呼びもせぬ。彼は泣いて居るだらう？、私は何だか可愛相になつた。如何な男だが窺いて見やうと思つたがこの暖い火煙が離れられぬ。が「如何な男だらう」と胸の中で絶えずこんな思ひが、煌めく。

「うどーん」と又千切られて飛んで居る様な声が、風に送られて聞える。

私は堪らなくなつた。

易者は未だ居る。

(明治42年1月15日 9巻2号)

一年中占いの客を求めるが誰も見向きもしない易者、「うどーん」と夜鳴の聲

が風の絶え間に咽ぶ」ように聞こえる売り子の影。彼らへの同情が作者にある。未明は「運命を卜ふ人も不知の運命につながれてゐるのではないか。」と評している。

二作目は、中島孤島の選で『論文』欄の『四等』として九巻六号に掲載された「憤れ」である。

憤れ

大阪市南区宗右衛門町 宇野 花守

「人が若し左の頬を殴つたら、右の頬を出してやれ」と誰かが云つた、成程さうだ。ならぬ堪忍するが堪忍と云ふのはこゝだ。然しそれもこれも皆過去の生産物に違ひない、吾人は今少しくこれが意義を押し広めようと云ふのだ。

人が若し己れの頬を殴つたら、「何ッ」と云つて打ち返すのは勿論賢くない。然し人に左の頬を打たれて「こちらの方も打つて下さい」と云つた風に右の頬迄御丁寧に突き出すのは、これ又馬鹿と云ふ誹を受けぬわけにはいかぬ。今日の様にこんな複雑な世の中、

中に、そんな御人好しは気の毒ながら生存競争にあづかる事は覚付かない。

打たれて打ち返し、悪口を云はれて云ひ返す。同じく怒りつばいお安い人物たるに違ひはないが。足で頭を蹴られても尚金子と云ふもの、為に、「ハイコラ」と人の下につくのも亦不甲斐ない人間に相違ない。

憤れと云ふのは此処だ。それを説くに先だちて僕は「怒」と云ふ事と、「憤」と云ふ事の区別をして置かう。——勿論これは僕都合の区別だが、然し恚う考へても悪くはなからう。

人に頭を打たれて直「何ッ」と殴り返すのは即ち、「怒る」で、古への君子の所謂「怒るな」と戒めたのはこれだ。「憤る」と云ふのは大に趣きを異にする。人が頭を殴つたら「何ッ」とは思ふが其の怒りは心の裡で炎々と燃えて居るのだ。そして其の傷は逃げて了ふのを云ふのだ。「怒るな、而して憤れ」と云ふわけはこゝにある。無暗に怒る者があればこそ、新聞の三面は種が盡きぬのだ。少しも憤らぬ反動のない人間が居ればこそ、「それや」と云つて食を投げてやつたら、ペコペコと頭をさげて拾ふ乞食と云ふ者が絶えぬのだ。即ち人が若し己れの頭を殴つたら須らく逃げるべし。而して如何したら間接に痛切に文明的な復讐をしてやらうと考へて、始めて真人間たり得るのだ。此処に於て僕は「ならぬ堪忍する

べし而してそれが文明的の復讐を忘るべからず」と云ふ奇妙な論を諸君の前に呈出するわけだ。

終りに臨んで自慢じやないが、僕が此論をものするに至つた動機を語らう。僕は平生から数学が大厭ひ。だつて点も四五十位を上下して居る。然るに一昨年の一学期の試験成績が発表された時、僕は第一に数学如何と、見ると(幾何三角)平均二十点と云ふ情ない点じやないか。一時は教師の家へ怒鳴り込まうかとも思つた。然しそれは止めて悄悄と家へ帰り二三時間も机の前で考へた末起つた思ひが此「何ッ」であつた。で早速本箱の蓋へ大きく「憤」と云ふ字を書いた。時々忘れるが机の前へ坐ると直ぐこれが目につく。恚うして「何ッ」を心の奥からいつも促がした。すると二学期には平均九十と云ふ素晴らしい点を取つた。それから試験の数は四度廻つた。其度毎に平均八十点以下は下らなかつたのは事実である。

(明治42年3月15日 9巻6号)

孤島が「怒」と「憤」を分けたのもよいが、それよりも自分の経験を叙べた所が本論の生命だ。」と評しているように、宇野の成績と性格がわかる飄逸な作品といえよう。

三作目は、小川未明選の「散文」欄の『四等』として九巻九号に掲載された「人柱」である。

人柱

宇野 花守

それは雨のシト／＼と降る日の、午後六時頃、私は長良川の畔に停つて、心ゆくばかり水の流れや、四辺の景色を眺めて居た。

ふと眼を転じると、長さ八町の日本一だと云ふ、西成大橋が、広い広い川を横ぎつて架つて居る。

四辺がボツ／＼薄暗くなつて来る。大橋の向岸が幽霊の裾の如に、ドンヨリした烟に熔けかゝつて来た。雨はもう上つたらしい。

私は傘をすばめて、矢張りこの夕暮の夢の如な大橋を、ジーツと眺めて居る。何だか恚う気が遠くなつてきた様だ。

今迄巍然として控えて居た大橋が、いつの間にか昔の板橋に變つて了つた。そして今私は其の板橋の上に停つて居る如な気がした。

板橋の幅は二間程であつた。板と板との接目が二寸程もある所が少くない。勿論欄干のなかつた。若し車など行き違へばガタ／＼と自分の身が上下へ揺られた。而して処々に三尺四方位の板が橋の横に突き出て居て、一度に車が二台も行き違ふ時に、そこを通る人の避難所となつて居る。

六ヶ月程前に私はこゝへ来た事がある。そして別に用もなかつたが、ブラ／＼と渡つて見る氣になつたが、手分と渡らぬ中に厭になつて引き返した事がある。淀川の水が毛磨の関門で二つに分れて、一つは大阪の市中に入り一つは此所へ流れて来る。で、水の量は至つて少ない、川の両側に少し帯を引いた位み、流れて来るに過ぎぬ。舟の通ふのは左側丈けだ。然し長雨が續いて、彼方此方の川の水が増して来ると、毛磨の関門は閉がれて了ふ。水は遠慮なしにドー／＼とこゝを流れる。だから水が出たら直此橋は流れた。ふと私は先程憩んだ、茶店の爺の話を思ひ出した。爺の歌つて聞かして呉れた歌が、耳の遠くで聞える如に思ふ。

ものを云はうまい、もの云ふた故に

ぬしは長良の人柱

人を呪ひ殺す、白髪の婆さんが、何処か遠くの山の中で、歌つて居る如だ。

ふと今迄見えて居つた板橋も消えて了つた。川の彼所此所に棒が立つて居る。穴が沢山掘つてある。――架橋工事をして居るのだ。

前に云つた如く、此橋じゃよく流れる。それ丈け兩岸の人は苦心する。而していつの程より此橋を流すまい為には、人柱をせねばならぬと云ひ出した。人柱と云ふのは、橋桁の下に一人を犠牲にして埋めるのだ。橋が流れて新設する度に、それについて色々苦心する。茶店の爺さんの話が恚うだ。或時もそれに付いて、架橋委員が頭を揃えて相談した。誰も口を出すものがない。と其中の藤村吾郎と云ふ男が進み出て

「皆さん、今皆さんが着けて居る袴を脱いで、それを川に浸けて、若し其袴が沈んだら、その持主がその任に当りませう」と云つた。で議は直それと定つた。そこで皆河の畔へ来て、手をふるはしながら袴を水に浸けた。と只一つ吾郎の袴が沈んだ。

吾郎の袴の腰板には吾郎の妻が、兼ねて注意して金の板を入れてあつたのだ。ものを云はうまい、もの云ふた故に。と云ふ語にはこんな深い意味が、こもつて居る。

ふと私は川を見た。すると向岸から多数の人がやつて来る。沢山居るが至つて静かだ。一番大きな穴の方へ向つて来る。人々の中に只一人、白無垢を着た男が

居る。吾郎。生埋。
と私の心が叫んだ。
ぬしは長良の人柱……声は私の耳から入つて、心臓を貫いた。小さい小さい声だ。然し鋭い。

私はギョツとして我にかへつた。日はもうトツブリ暮れて居る。巍然として横たはつて居る、西成大橋にはチラ／＼と花火の如に十数の燈が点つた。

(二月二十一日作)

(明治42年4月20日 9巻9号)

黄昏時の幻想的な風景がよく描かれている。未明も〈最後に大に揮つてゐる。ベツクリンの画でも見るやうな大妖怪趣味が面白い。〉と評している。

四作目は、同じく小川未明選の「散文」欄の『二等』として九巻一三号に掲載された「焼跡」である。

焼跡

大阪市南区宗右衛門門 宇野 花守

恵比須町を南へ突き抜けると、野良へ出る。町はづれは何処でも穢いが、こゝは特別きたない。木賃宿や不潔な食物店のゴタ／＼と軒を並べて居る所から、紀州街道が始まる。私の郊外散歩は毎も此道へ来る。

野良へ出ると、一時にガラリと晴れる。紀州街道は一直線に南へ走つて居る。西はズツと大阪湾迄田圃が続いて居る。此単調な中に、東には殆んど街道と並行に、丘陵が断れ／＼に続いて居る。丘は南に走つて住吉に尽きる。其北端を阿部野ヶ丘と云ふ。

いつか、いつかと思つて、いつも志を達する事が出来なかつたが、今日始めて此の丘に昇つた。

丘の上は可成り広い。青草が茫々と生えて居る中に葉のない枝の少ない立木が、スク／＼と二十本と立つて居る。私は草を踏んで、懐しさうに一本一本と、木に近寄つて見た。

どの木も、どの木も片側は焼板の如に焦げて居る。スク／＼と立つて居る木々は、皆死んだ樹木の空體に過ぎない。

私はフト思つた。「焼跡だ」

一昨年の冬であつた。西風がホ／＼と、書斎の窓を頻りにたたく夜であつた。突然騒々しい警鐘の音が聞こえたので、私は直ぐ戸外へ出た。電信棒が悪魔の雄叫びの如になつて居た。東南の空が直紅になつて居た。「天王寺病院だ。天王寺病院だ。」人々が口々に叫びながら、頻りに南の方へ飛んで行つた。

私は十二三町の道を一散に馳つて、天王寺駅前の鉄橋に停つた。病院の姿はもう半分なかつた。残りの半分が猛しい焰に包まれて居た。火の子が頻りに東南の方へ散つて居た。冬の事として、生木がバチ／＼と燃えて、松の木や、ユーカリの木が仕掛け花火の如に、煌めいて居た。消防や警察の聲が手にとる如に聞えて居た。消防や警官の聲が手にとる如に聞えて居た。病人を乗せたタンカの群が、引つ切りなしに橋を北へ渡つて居た。慙うして阿倍野ヶ丘の天王寺病院は、一時間と経たぬ中に、焼け爛れた樹木を残して、消えて了つた。

春が来て、夏が過ぎて、二度目の冬が来た。その冬も去つて再び春が来た。草は茫々と繁つて居る。然し目に触れるものは皆淋しい。焼け死んだ樹木が、病院の墓の如に、シヨボン／＼と立つて居る。

私は何だか物足らぬ如な気がして、ブラ／＼と歩きだした。

フト目目草茫々の中に、古井戸に出会した。破壊れた人造石の縁が傾いて居る。其下に名も知らぬ赤い花が一本、ほ、笑んで居る。

「焼け跡」と私は再び叫んで見た。井戸の中を窺くと、大きな蛙が恨めしさうに、穢い頭を浮べて居た。

(四月二十八日作)

未明の〈病院の焼跡といふ淋しい切々の感がよく表はれてゐる。叙景も簡潔で印象が深い。〉という評がこの小品の特徴を捉えていると言えよう。

五作目は、中島孤島の選で『論文』欄の『秀逸』として九巻一四号に掲載された「楠公と南洲」である。

楠公と南洲

大阪市 宇野 花守

頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、武門政治の潮流は滔々として大河の如な勢で流れた。その非常なる奔流を喰ひ止めた如な大事件が二つあつた。

建武中興と明治維新はこれである。二者共に武門政治を覆して、王政を復古しや

うとした。この大改革と云ふ舞台に立つた、勤王志士と云ふ花形役者が、多く種々の場所に出没して、国史に花を咲かした事も似て居る。只前者は失敗して、後者は成功した。

前者の中での最も人気役者は楠木正成である。後者に於て最も最負（マシ）を受けた役者は西郷隆盛である。

忠臣の代表者として、日本人は楠公を押すのを憚らぬと共に、豪傑の尤として南洲は、五本の指に最初に折られる。

忠義なる事に於て、楠公はしかく吾人の龜鑑であると云ふ所以は、万事に傑れて居つた。君に忠なると共に下に仁であつた。仁者であると共に智者であつた。同時に勇者であつた。然らば隆盛は如何であらうか。南洲の名は日本人の崇拜の的である。彼は崇拜の的になる価値があつた。豪傑なるの半面に於て、彼は君子であつた。英雄色を好むと云ふ如な、行為はなかつた。彼は勇者であると共に仁者でもあつた。要するに日本の好むあらゆる点具备して居た。

この両箇の偉人は厭く迄、其の君に仕へるに誠忠であつた。人に対するに厭く迄仁義をつくした。然し細かくこれを見ると、その一生を通じて何処か違ふて居た。

足利尊氏西海の精兵を率ゐて、海陸より東上せんとする報が伝はつた時、正成は具さに計を朝廷に奏上した。然しわからずやの為に退けられて、速かに兵庫へ出發すべき事を命ぜられた。正成は「万事休せり」と思つたが、憤りもせずして湊川に討死に行つた。

維新の大業は大低片附いた。我国は只々文化を布くに忙しかつた。其時だ。朝鮮が我国に堪ふべからざる無礼を加えた。武士道で固められた健児の腕は鳴つた。此時隆盛は起つて征韓論を称へた。然し策は用ゐられなかつた。隆盛は憤つて故山に帰つた。遂に万止むを得ざる次第に到つて反旗を翻した。

炳たる我国史中の赫々たる多士の中に、一頭地を抜き出した二英雄は、かくの如くにして仆れた。

孔子は云ふた。人知らずして慍（ウレ）らず、これ君子ならずやと。

忠良無欠の正成が長所中の長所はこの「人知らずして慍らず」てふ氣宇であつた。即ちこれこそ楠公生涯の成跡の縮図ではあるまいか。彼は長所に於て仆れた。完全無欠の隆盛が玉に瑕はこの「人知らずして慍らず」と云ふ氣宇がなかつた。

僕は献身的生涯を立派に長所で仆れた正成を崇ぶと共に、奮闘の一生を僅か一の短所で仆れて、所謂有終の美を致さなかつた隆盛を最も惜しむ者である。

「秀逸」として掲載されているが、その歴史認識は当時の青年のその域を出ていないように思われる。

六作目は、小川未明選の「小品文」欄の『佳作』として九卷一四号に掲載された「お亀嬸さん」である。

お亀嬸さん

大阪市 卯の花守

餅屋のお亀嬸さんの家の柱に、煤けた大きな竹筒が三本かゝつて居る。お亀嬸さんは日が暮れて、売上げ勘定が済むと此筒へ二銭入れる。

「これに一ぱい貯たつら、お伊勢さんへ参りまんね」と云つてからもう一年になる。然し漸う一つの筒が一ぱいになつたかならぬ位だ。入れてから二度病氣にかゝつた。其度毎に

「遂に死に金になつたか」と云ふ。然し未だ不思議に死にもせず生き残つて居る。私は、お亀嬸さん屹度あの竹筒を破つて、お伊勢さんへ行ける時分があると、心の中で思つて居る。

(同右)

未明は「哀れな老婆に全情した言葉。果して行けるだらうか。」と評しているが、中には祖母里勢への思いが含まれているかもしれない。

七作目は、同じく小川未明選の「小品文」欄の『佳作』として九卷一九号に掲載された「嫁入」である。

嫁入

大阪市 宇野 花守

暈を被つた月が、臭を吹きかけた鏡の如な、鈍い光を投げて居た。蛙一疋も鳴かず、何だか世界はトロンとして、息の窒まる如な晩だつた。

ボーツと煙つた鎮守の社の蔭から、一つ二つ……五つ六つと、赤い提灯が村の方へ浮いて来る。と村外れの公孫樹の木の下から、又同じ如な赤い提灯の群がユラユラと、鎮守の方へ漾よふて行く。

池の畔で提灯の群は相ふた。九つ十を……十五十六の提灯はユラ／＼と入れ違

つて、此度は一所になつて村の方へ来た。池に影つて、無数の提灯が暗い闇に浮いて居た。

翌日、赤白五つの大きな嫁人饅頭が、村の家々に配られた。

(明治42年9月1日 9巻19号)

未明は「実景らしい。」と評しているが、夜の婚礼行列の有様はいかにも幻想的に感じられるがどうだろう。

八作目は、徳田秋声選の「短篇小説」欄の『佳作』として同じく九巻一九号に掲載された「村はづれの家」である。

村はづれの家

宇野 花守

校長に教えてもらつた通り、村外れのユーカリの木を目指して、私はトボトボと野道を辿つた。

西も東も展開おひらいた中で、ユーカリは思ふ様黒々と繁つて居る。その南の方に同じ如な高さの、同じ如に繁つて、公孫樹の木が立つて居る。遠くから見ると、この二本の木は村のよい目標だ。私はそのユーカリと公孫樹の暗い蔭の下に建つて居る家はどうなだらうと思つた。見た。家は一寸広さうだが、白く塗られた壁は半ば剥落して、灰色の醜い姿を表はして居る。

十分程後、私は其の家の敷居をくぐつて、暗い勝手たの隅に停つて居た。

「御免なさい。御免……御免」私は三度程云つた。

「ハイ」女の声がある。

「どなた」と云つて重さうな襖をガラツと開けて、出て来たのは、五十七八の老女だ。直ぐ目についたのは髪を切つて、グツと後に撫でつけてあつた。然し何処ともなしに上品な侵し難い奴人だ。

「あのー、私は本山と云ふもので、大阪のもので御坐いますが、此度この村の学校へ勤めることになりましたもので、何処かこの村でお世話になり度いと思つて居りますが、別に役場の方でもこれと云ふ家もないが、一つ此方へお頼み申したかどうか、とまあこんなわけでお伺ひに上つた様な事で御坐いますが……」と漸うこれ丈云つた。

「あ、それで御坐いますか、それはそれは」と笑顔を造つて、

「是非私の方もお願ひ致したいので御坐いますが、一寸親類内の方から、病人が一人来る事になつて居りますので、えらい折角で御坐いますが……」と此處挨拶。

「ハア」と云つたまゝ、私は一寸困つて黙つて居ると、

「が貴方明日から直ぐ学校へお勤めになるのでせうな……大阪から……それはお困りでせう。その中に又何かよい処が見付かりませうから、お関心なれば、それ迄居て戴きましても宜しう御坐いますが」私は仕方がないから、

「ハアそんならどうかお頼み申します。では明日からお世話になります。……や失礼しました。左様なら」

私は暗い家を出た。外へ出ると、パツと急に明るくなつた如な気がした。

翌日の夕方私は学校を退けて此家へ歸つて来た。

「お帰りなさい」もう家内抜ひに、下女は丁寧はなやに云つた。

自分の私の部屋と定つたのは玄關側の狭長い四畳の間だ。

其夜は家が変わつた始めてなので、何だかソワソワする。机の前で何するともなしに煙草をくゆらして居ると、つと向ふの方の部屋で話声が聞える。私は聞くともなしに聞いた。主婦と下女とだ。

「ハア、公孫樹の木とゴムの木との間、丁度今の家は離家で、ツツトこの辺は前栽やつてんわ。木村さんの家な、丁度あの辺に門があつたんや。ハアそりや広いもんやつてんで。」

「ヘエー。今の家でも大きいと思ふてまんのに。まあ」

「死にはつた旦那さんの時に、こんな大きなもんは要らんこつちやと云ふて、ズツと縮めてこないになつたんや、学校の費用でも半分引き受けたたんや」

寢床が変わつたので、翌朝は早く眼が覚めた。床に入つたまゝ、雑誌を見て居ると、主婦と下女との会話が聞える。

「竹。まあお前どんな氣で上げたんや。仮令蚕豆でも、そりや安いもんやけど、自分で買ふたのを、御前様に具へると云ふ氣がなあ。仮令こんなもんでも志やよつてに上げて置かうと思つたんか」

「ヘエー」声は至つて小さい。

「銭は返したげるは。なあ真に感心や。その志が何とも云へん。お前は屹度出世するで。妾いつも人に遇ふたらそう云ふてんね。此度の事かて、屹度話するわ。真にお前は……屹度出世するで」

「ほん一寸だけど、フツと氣が付きました、上げときましてん」

「フン、些^{ちよ}とでもえ、のや。その志が何とも云へんね」

私は寢床の中で黙つて聞いて居た。

其翌朝も早く眼が覺めた。

「誰や蚊帳の外に停つてはるやないか。妾や男の人やよつてん、弥助はん（当家の出入の者で、無人の為に毎晩泊りに来る。）やと思ふて、弥助はんか、と云ふと黙つてはんね。弥助はんか。と二度目に云ふた時にはもう誰も居やはれへんわ。……あれや屹度死にはつた旦那さんや。丁度今日がお前四十九日やろ。坊もそれと同じ夢を見た^{と云ふてんね}」

「ヘエーエ」

「坊。そやなあ、お前は丁度その夢を見てんな」

「フム」中学一年に通ふて居る当家の末子（外は皆外^{ほか}に居る）が小さな声で答へた。

来てから丁度六日目、明日愈よ宿を変へると云ふ日だ。私は学校から歸つて来ると、主婦が出て来て

「先生誠に済みまへんけど、今日から先達てお話しして居ました病人が来ましたので、今日は此方の座敷で一晩辛抱して下さいませ」と云ふ。

丁度仏壇のある室だ。夕方主婦のお念仏で随分喧ましかつた。そこへ病人と云ふ三十位の一寸意気な女が出て来て、

「先生、宿換さして済みまへんな」大きな声で云つた。

「いーえー」と私は云つたま、書物に読み耽つて居ると、女は尚

「妾が此方へ養生に来ますについて、子供を連れて来ましたので、又学校の方で御厄介かけます」と云ふ。

「左様ですか……」私は素気なく云つた。

「何分宜しうお頼申します」

「ハア」

私は元氣のよい病人だと思つた。然し顔色は極く青い。

翌日、私は宿を変つた。

学校へ十一位の男の子と、九つ位の女の子を連れて、昨日の女の病人はやつて来た。

男の子は私の受持になつた。母親に似て極く色が悪い。

その翌朝、私は学校へ来る道で、その病女が子供二人の手を引いて来るのに出遇つた。私は一寸会釈をした。

「先生早速で御坐いますが、中村とか云ふ子が、砂をかけた^{と云ふて}歸つて来て、如何しても行きませんので送つて来ましたが」と云ふ。

「私の受持ですから、宜しう叱つて置きます。兎も角も学校へお越し下さい。一寸お先へ」と私はスタスタと学校へ来た。

暫くして女も来た。而して門の入口で中村と云ふ子供を捕へて、青筋たて、叱つて居た。校長は見兼ねて側へ行つた。

漸くなだめて教員室へ歸つて来た。女も歸つた。

「別に怒る程の事もないんです。子供の事ですから何方も悪いんです」と云つて居た。

「昨日も役場の人が云ふて居るのに、彼女や神経病者です」と附加した。私は

「成程」と思つた。駒田先生も

「成程、ヒステリーらしい顔ですな」と云つた。

（同右）

選者の評はないが、若江尋常小学校へ赴任したときの実景だろう。（神経病）「ヒステリー」と言う言葉は後年につながるものとして興味深い。宇野が当時からその知識を多少なりとも持っていたことがわかる。どこからそれを得たかが気になるところだ。

九卷二〇号では、徳田秋声選の「短篇小説」欄に入選しているが選評のみで作品の掲載はない。選者の選評のみ引いておく

短篇小説選評

徳田秋声

◎日覆（大阪府下中河内郡若江尋常小学校内、宇野花守）一寸面白い処を描いてある。此の人達の色がよく出てゐる。しかし唯それだけである。今少し中心思想を据えて置いて、事象の描写をそれに釣合を取つて取捨させる必要がある。同じやうなことが幾箇も重なつて出るのは、感興を殺ぐ。

九卷二三号には、入選者名と住所のみが掲載されているがその部分のみ引いておく。

入選者氏名録

宇野 花守 大阪市南区宗右衛門町福岡方

（明治42年10月23日 9卷23号）

九作目は、小川未明選の「散文」欄の『佳作』として九卷二四号に掲載された「大長寺」である。

大長寺

宇野 花守

〇〇兄足下。

悲惨なものは文明だ。恐ろしいものは金力だな。夕陽丘に泣き、茶臼山に悼んだ私は、今又滅びゆく大長寺の運命に泣かねばならなかつた。

六月始めの或る日のこと――

私は網島停留所を下りて、花なき桜の宮の堤に沿ひ、淀川橋を渡つて大長寺に詣つた。

寺は毛利大長寺殿の寄進せられたものだ。……本瓦葺の本堂には、豊臣家の五三の桐と、毛利家の鷹の羽をうち合はした紋のついた幕が、寺断滅の悲しい最後の日を飾つて居た。

本堂の前には、今や無心の荒くれ男に、何処かへ引きさられんとして、未練さうに紙屋治兵衛、紀伊国屋小春の比翼塚が立つて居た。

釈了智、妙信春女、……二つの名を刻んだ一つの石碑は幾何に幾多の青年の心を動かしたらう混濁の世に生をうけて、まゝならぬ浮世に清い恋に死んだ二人の遺骸は、心静かにこゝ大長寺の庭に眠つて居たのに……

墓の後ろへまわつて見た。古びた石の地蔵が立つて居た。百余年――この石地藏の欠片をとつて、儂い恋を祈つた男女が幾人あつたらう。散々に壊された石の地蔵は、いつも新しい赤い涎掛けをして、暗い庭の隅から幾多の恋を眺められたか……

享保七年寅七月十四日――寺では盛んな十夜のお勉めが行はれた。爺さん婆さんの白髪頭に交つて。若い二人は小さい声で念仏を称へて居た。お勉めは徹宵行はれた。……

暁の鐘は鳴つた。二人はトボトボと寺の門を出た。

やがて二人は立ち止つた。左はおん寺の桜の宮、右京橋八軒屋とした道標が寂しく立つて居た。

申し合はした様に二人は手を合はした。

東の空はホーツと白色を徴して来た。男は思ひ切つた風で、懷から短刀を出した。女は従順に手を合はしたまゝ、膝まづいた。

「小春」幾度か躊躇つた後、男はや、大声に強くかう叫んだ。否やグツト短刀は女の喉を突きさした。女は声もたてずに仆れた。二分と経たぬ間に男もドツと女の上に仆れた。

其日の夜は明けた。哀れな短い遺書が、本堂の薄暗い隅で見出された。恚うして二人の墓は大長寺の庭にたてられた。いつの程よりか恋の地藏がその後ろに安置せられて、二人の冷たい墓を守護られた。

〇〇兄足下。

午後三時――本堂の前にも、門の扉にも、洋服を着た男、法被を穿つた男が、石段に俯くまつたり、壁にもたれたりして、冷やかな眼を見張つてキョロキョロして居る。

六月〇日。寺の周囲に黄色い板塀が建つた。

「何某所有地」……百余年の旧跡は全く滅びた。

噫惨かな物資の迫害！恚うして次第に人の記憶から離されて了ふ、呪はれたる古墳……

〇〇兄足下。

そこには、断腸の響がある。

(明治42年11月1日 9卷24号)

選者未明は（此の一篇を見て多少の感慨を催さる人があらうか。）と評しているが、大長寺に散つた小春治兵衛の恋を偲ぶ哀感は、清二郎の世界に近いものがあると言えよう。

一〇作目は、同じく小川未明選の「小品文」欄の『佳作』として九卷二四号に掲載された「蜘蛛の巣」である。

蜘蛛の巣

大阪市 宇野 花守（格次郎）

軒の蜘蛛の巣が日の光を受けて、キラ／＼と輝いて居る。

今睨つた許りの様な蜻蛉が、ハツと思つて居る間に、糸にかゝつた。眠つて居るのだと思つて居た蜘蛛が、スル／＼と網を伝ふて、蜻蛉を捕へた。蜻蛉はジタバタあばれて居た。蜘蛛は平気で口から糸を吐いて、グル／＼と蜻蛉を独楽の如くに回して、縛り上げて了つた。

縛られた蜻蛉は、折々身動きをするが、何の甲斐もない。蜘蛛はスル／＼と元の位置に返つて、又眠つた様にジーツとして居る。

（同右）
未明は「運命を象徴したものだと思ふ。」と評しているが、写生文のような感じのする小品である。

一作目は、河井醉茗選の「評釈文」欄の『秀逸』として同じく九卷二四号に掲載された「彼女」である。

彼女

大阪市 宇野 花守

憎しとは思へず君が泣く見ては心はなだ静かなれども（夕暮）
厭だ。もう思ひ出しても厭だ。酔ふて居つたのだとはいへ、よく彼れことが云へたものだ。よく彼れことが出来たものだ。思ふて見ると益々厭だ。此れ厭なことではない。あゝもう私は醒めたんだ。

今日も亦彼女が来た。

フと見た時は「又か」と思った。然しあの悄悄とした姿を見ると、さすが可愛想だと思つた。

クド／＼と云つて、果ては泣き出した。泣いて私の膝に泣きくづれた。

私は無音で坐つて居た。抱き起こして慰めようとも思はなかつたが、振り放し度くもなかつた。

私の心の奥の奥を淡い誇りが、かすかに流れるのを覚えた。何だか今かうして居る所を人に見てもらひ度い様にも思ふた。いつ迄も恚うして居たい如な気がした。

然し現在わが前に泣いて居る女には全然没交渉の様に思はれてならない。女は真剣に涙を流して居るのも解つて居る。然し私の心は何だか膜一枚隔て、人の事である様に思はれる。

よい歌か悪い歌か知らない。読んでスラ／＼した所難のない所が私には捨て難い味がする。少なくとも私はよい歌だと思つて居る。

（同右）

宇野の短歌の投稿は数少ないが、夕暮ら当時の新進歌人にも関心を寄せていたことがわかる。

同じく九卷二四号には、徳田秋声選の「短篇小説」欄に入選しているが選評の

みで作品の掲載はない。選者の選評のみ引いておく

短篇小説選評

選者

◎かづらや家（大阪南区宗右工門町福岡方、宇野花守）○氏筆がそれからそれへと飛んで行くうちに、一家の空氣、人々の運命と云ふやうなものが暗示される。しかし作としては好くはない。今少し深く考へてほしい。

（同右）

3

明治四三年一月、祖母里勢を連れて奈良の天満村に戻るが、寄寓先にて里勢が急死する。一家にはなかなか光明が射さなかつたが、宇野の念願が叶つて、親戚の援助を得て、四月早稲田大学英文科予科に入学する。おそらくそこまでが宇野の投稿時代だつたのではないか。

明治四三年の投稿一作目は、一〇巻一号の水野葉舟選の「散文」欄で『賞』をとつた「行路の人々」である。

行路の人々

大和国高市郡天満村根成柿中野繁蔵方
宇野 花守

——（その二）——

「あーめー、じようせん館にかた館——」

照つても降つても、夏も冬も、紡績の三時の笛がなると、屹度館屋の白髭爺さんは来た。

夏になれば、丁度お文さんお母さんが、昼寝をして居られる最中、——私等は日のかん／＼照る中を「水あぶり」などに余念もない時、

「あーめー」と云ふ、この老爺の眠い声は、妙に私等をチャームする力があつた。「又かいな、些とう／＼したと思つたら、直起すねでな」眠たさうな、煩さうな顔をして、恚う云はれるお母さんから、よく五厘一銭のお金を頂戴した。

雨の日には、頸と襟の間へ洋傘をさして、来た。

「ウエー、おつさん又東西屋の真似しとおる」此慶事を云つて、私等が面白さうに對手になつてと、

「あめー」おつさんは、見向きもしなかつた。

十軒路次だつた。おつさんは鮎の車を、角口へ止めて置いて、路次へは入つて来た。一人なり、二人なり大抵の家には、私等と同年輩位な子があつた。で

「あーめー」と云ふおつさんの売り声は、決して徒勞に帰せなかつた。

「おつさん、わたいとこもおくなあれ」

「わて、じようせん鮎だつせ」

「わいら、かた鮎やで」

おつさんはこれらには答えもせず、車の所へ行つた。始めの中は、グズグズして居る、おつさんを待ち兼ねて、思ひ思ひに錢を持つて、貰ひに行つた。が、おつさんは、決して渡してくれなかつた。仕方がないので、皆は各々自分の家の戸口に佇つて居ると、おつさんは木に巻いた鮎や、赤い袋に入れたかた鮎を、持ち難い程持つて、一軒一軒金と引き替へに、渡して行つてくれた。

然し、時には一銭か五厘位しか、売れぬ時がある。

「おつさん、かた鮎五厘がとこ、持つて来とくなあれ」

そんな時に慍う云ふと、

「エーイ、邪魔くさいなあ」鼓枯れた声で慍う云つて、軽く舌づ、みをうつた。或る時、おつ母さんにそれを云ふと、

「おつさんも年をとつて居る依つてに、気が短くなつてんね。ハ、ハ、ハ」と半分笑つて云つて居られた。

それ等の小さな顧客は、もうそれぐ大きくなつた。然し、おつさんの顧客は後へ後へと出来て行く。私等とよく買ふた秀子ちゃん、もうお母さんになつて、其の子の三歳久ちやんが、もう顧客の一人になつた。

おつさんは今も尚来る。矢張り白い髭に、雨の日は頸に洋傘——あの時分と比べると、余り老けても居ぬ。

——(十月三十一日)——

(明治43年1月1日 10巻1号)

葉舟は「君の作は、もう少し沈んで見、考へたものになつたよからうと思ふ。『行路の人々』と 言ふ題は非常に面白い。」と評しているが、宇野が少年時代を送った宗右衛門町の「十軒路次」の日常をよく見ていると言える小品である。

二作目は、一〇巻四号の水野葉舟選の「散文」欄で『二等』をとった「唄」である。

唄

大和高市郡天満村根成柿中野繁蔵方
宇野 花守

隣りの子守はよく唄をうたふた。

それは遠い国の唄だ。此辺で聞く事の出来ない一種あはれのこもつた節を、美しい声はよく伝へた。

「あの子守終日唄うたふから」慍う云ひながらも、人々は知らず知らずその仕事の手を止めて、そのゆかしい唄に耳傾けた。

それは、つひに一週間程前からの事だ。

朝、私はいつも夢心地でその唄を聞く。それが段々はつきり耳に響いて来る。とフツと眼を開くと、戸の隙目から朝の日光が流れて居る。

「もう朝だ」

此頃私は朝いつも慍うして起きる。

朝飯を食つて了ふ頃にはもう唄は聞かれぬ。昼前にその唄は遠くから聞こえて来る。段々近づいて来て、隣りの家の前で止んで了ふ。昼過、又唄は隣りから起つて遠くへ行つて了ふ。

心ゆくばかり聞けるのは夕暮だ。

室内が薄暗くなつて来る。と私は書斎の窓を開ける。東山が濃い紫に、くつきりと冬枯れた野を限つて居る。其頃には屹度山の中腹から白い煙が糸の様に上つて居る。

此時だ。かの唄は何処からともなく聞えて来て、段々近寄つて来る。而して夕暮の静寂な空気にかすかに反響して、深い深い哀れを添える。——よく聞くと二人の声だ。

物の哀れを知らぬ村人の耳を傾けさすのも此時だ。

唄は近付いて、私の家の前も過ぎ、隣りの家の角を通つて、野良へ出る小徑に沿ふてゆく。

唄は極く短い。而して色々あるらしい。一つの唄が済むと、暫らく夕暮の静謐に返る。と又どちらかが新らしくうたひだす。直他の一人が従いてうたふ。いつの間にか一人がうたつて居る様に聞える。思はず読書の眼を挙げると、唄も終る。又暫らく静かになる。

慍うして唄は波の様に起り起りして、野の方へ消えて了う。

しばらくして、もう唄の事なぞは忘れて了ふ時分に、又遠くから聞えて来る。

その時分はもう村はすっかり灯がついて居る。

唄は隣りの家の前で些と止んで、直ぐ今度は一人の声で西の方へ行つて了ふ。

「何処の国の唄だらう？」私はほつと我に返つてからいづも慙う思ふ。

広い広い野の真中にある寂しい村を思ひ出す、かと思ふと深い山の暗い林の中にある三四軒の部落が目に見え。時には又海に沿ふた漁夫村——それらは皆夕暮の景色だ。而してかの（未だ顔を見た事はない）子守が、その親の家の前で、心ゆくばかりうたふて居る姿が見える。

今一人は酒屋の子守で、隣りの姉妹だと云ふ。

（明治43年2月15日 10巻4号）

選者が（情緒のあふれた作だ。たゞ深さが足りぬ。）と評しているように、どこからともなく聞こえてくる唄に空想をふくらませるところにロマンチズムが感じられる。

三作目は、同じく一〇巻四号の編集局選の「評釈」欄で「三等」をとった「最後の節」である。

最後の節

大和高市郡天満村根成柿中（ママ）部繁蔵方
花守野の人

The room was deserted.

A strong breach of despair mounted from the
Boulevard, and swelled the curten.

"To Berlin! to Berlin! to Berlin!"

ゾラの名作「ナ、」の最後の節である。

悪徳は悪徳を生み……ナ、は慙うした家系に、生れながら悪徳の子であつた。私は巴里と聞くとナ、を思ひ出す。

巴里の真中のグランドホテルに、彼女は業病に伏した。賑やかな賑やかな中に、彼女は寂しい孤独を感じて、無間地獄に落ちた。花と歌はれた彼は、年中日光の射さぬ溝の中で死ぬ鼠の様に死んだ。

通り一片の人々は逃げる様に帰つて了つた。只一人の友達も帰つて行つた。外が騒しい丈け、室内は一層寂しかった。

薄暗い蠟燭の灯の下に、醜い死体は横はつて居た。

自暴気味になつた群集の吐息は、街一面に流れた。ハタ／＼と静かな中に、物に驚いた様にカーテンが揺れた。

「伯林へ！ 伯林へ！」

群集の中から出る思ひ思ひの群集の熱狂した叫び。

惨憺たる有様は恐ろしい程精細に描かれて居る。平面描写の効果を語つて居る。

静、死——動、不安、簡潔にやつつただけ、それだけ力がある。

（同右）

《評》として、（私は赤い罌粟の花をみる度にナ、を憶出す。ナ、のやうな生涯を私は送りたいと思ふ。此外玄嶺君の「女の一生」の評釈があつたが故あつて掲載することが出来なかつた。）とあるが、それよりも宇野が外国文学にも関心を持っていたこと、ゾラの作品を呼んでいたこと、《平面描写の攻果》に関心を持っていたことなどから、彼もまた自然主義文学の洗礼を受けていたことが確認される。

四作目は、同じく一〇巻四号の前田夕暮選の「消息短文」欄で「佳作」をとつた「放浪者の心持」である。

放浪者の心持

大和 花守野の人

「放浪と云ふものは空想して最も楽しいものだが、実行して最も辛いものだ。」

君は深切顔して教へてくれたが、僕でもその位の事は遠くから知つて居た。然し僕には放浪の苦しさよりも、束縛と云ふ事がはるかに苦しいんだ。

見給へ。籠の鳥は籠の中に居つたら坐して食ふ事が出来るのに、霜を踏み寒にふるへても、尚広い野山を憧憬して居るではないか。そこには鳶と居り鷺と居る。

山を越え海を渡り、スイスに行き 그리스 に流れたバイロンを君は馬鹿な男、自ら苦を求めた男だと云ふが、僕はさう思はぬ。

放浪者の心は放浪者が知る。彼は不自由な天地に沈黙するよりは、奮闘して自由を得んとした。

心を静めて、空ゆく雲を見給へ、馳せ狂ふ風の声を聞いて見給へ。そこに君は

バイロン^の心^の幾分^を会得^{する}事^が出来^{よう}。ひいては僕等^の心^の一^部を味^はふ事^が出来^るだらう。

(同右)

選者は、(放浪者の心持は、放浪者によつてより多く了解せられる。)と評している。放浪する詩人バイロンへの憧憬もまた宇野の内面に溢れていたのであらう。

六作目は、一〇巻八号の水野葉舟選の「散文」欄で「二等」をとった「故郷」である。

故郷

奈良県高市郡天満村根成柿中野繁蔵方
宇野 花守

少年世界を読んで居る時分だった。故郷とか、帰郷とか云ふ字がふと眼について。それからどの号でもこの字のなかつた時はないように思ふ。

故郷！それは楽しい懐しい所だと聞いた。それは大 低景色^のよい田舎で、そこには綺麗な花が咲き、可愛い鳥が鳴いて居る。東京に勉強に行つて居る太郎が休暇になつて、この暢かな故郷へ帰つて来た——こんな話も読んだ来がある。

「私の故郷は何処だらう？誰でも故郷はあると聞いた。私の故郷は何処だらう？」その時分から私は始終こんな事を考へ出した。

その時分、私は伯父の家に母と共に厄介になつて居た。伯父の家は大阪の賑かな街にあつた。私はそこから、朝夕「故郷」と云ふ山紫水明の場所を小さな胸に描いて、憶れた。

然し如何考へても私には故郷が分からない。私の兄は名古屋で生れた。而して私はズーツと遠い九州の熊本で生れた。而して私が生れた年、父は其処で死んで了つた。

「お母さん、私の故郷は何処だ？」

憊う私はよく母に尋ねた。その度毎に母は訝しさうな顔をして

「故郷？……大阪やが」と云つた。

私は故郷がこんな騒々しい大阪の様な都会だと云ふ事は、如何しても信ぜられなかつた。お母さんは故郷と云ふ事をよく知らぬのだ。憊う思つてあきらめた。

ある時私が母の側で絵草紙の様なものを見て居るとふと母が側から「熊本の家によく似たある。丁度こんな泉もあつた」と云つて、チヨン髻が二人座敷に座つて前栽を見て居る絵を指した。私はつくぐとその絵を眺め入つた、私の故郷は此處所だと思つて嬉しがつたが、直ぐ又元の寂しい氣になつた。

嬉しい正月や、天長節は幾度も往つたり来たりした。而して私は私は大阪で中学を卒業した。母の額にも明らかに皺が刻まれて来た。

「三河の豊橋に居ました頃、あの子(私の事)がお腹に出来まして、それから東京にも暫らく居ましたし、越前にも二ヶ月程居ましたし、遂に熊本で生れましたんだ。ホ……お腹の中で随分旅をしましたんだつせ」

いつか母が此處事を云ふて居るのを聞いた。然しもうその時分私は、私には故郷がないのだ、と云ふ悲しい自覚をして居た。私は別に何とも感じなかつた。返つて当然の様な氣がした。

或る日又系図を見た事もあつた。清和天皇の何とかとも書いてあつた。本国信濃ともしてあつた。海野信濃守と云つた様ないかめし名も書いてあつた。然し私にはもう何の興味も起らなかつた。

それから私は神戸へも行つた。河内の若江にも暫らく居た。そして今こ、(大和)に居る。

(明治43年4月8日 10巻8号)

ここで宇野は自らの出自をほとんどありのままに語っている。おそらく今存在する自己の危うさのようなものを感じていたのではないか。選者は(自分もこの「故郷なし」といふ感を味つた一人だ。そして、今その近想をたどつて、新しい創作をして居る。その時に君のこの作を読んで心動くのを禁じ得なかつた。或は自分は自分の興味に溺れたかもしれぬ。そして其日に君の作を見たかもしれぬ。勿論「故郷なし」といふやうな感さう深い悲しみではない。しかし知らぬ人は又解し得ざる悲しみだ。)という長い評を付している。

七作目は、同じく一〇巻八号の若山牧水選の「短歌」欄に入選した短歌一首である。

人の子の空しきさかえ聞く毎に母はさびしき顔をしたまふ

大和 花守野の人

(同右)

八作目は、一〇巻九号の前田夕暮選の「短歌」欄に入選した短歌一首である。

あたり見よ悲しからずや人等みな獣の如く碌々と活く

大和国 花守野の人

(明治43年4月15日 10巻9号)

寂しい顔をした母、碌々と生きるしかない人々の姿、ともに当時の作者の虚しい心情を語っていると言えよう。

九作目は、一〇巻一〇号の水野葉舟選の「会話」欄で『三等』をとった「老母」である。

老母

奈良県高市郡天満村根成柿中野繁蔵方
花守野の人

田澤基久

『あないして遊んで、もつまりめへんよつてな、何処ぞ近くにえ、欠員あつたら出さう思ふてまんね』

『さいやさいや、別に出などうやちう様な来でおめへんけど、な、あないして遊ばしてとくのん惜ういが』

『……………』

『なあ、あないよう朝から晩迄勉強しやはりまんな、よう肩こらんこつちやな……好きならこそ、なあえ、息子はんや、金は費ひはれへんし、あんなん少いわ、』

『い、え、……………朝から晩迄、放つといたら縦のもん横にもせえしめへねんで、掃除ちうたら箒持つた事もあれしめへんし、土瓶が倒れても、お茶がふいてようが放つたらかし、まああんなづばらも少のおまつせホ、……』

『ハ、……そいでえ、ね、勉強一心やよつてんなあ、丁度身代こしらへてはるようなもんや、ほんまに丁度そんなもみや、あいで何処ぞい出やはつたら充分だみな……ほんまに楽しみや』

『い、え、……若いもんと年寄と気が違ひまつしよつてんな、未だもつと上の学校へ行て勉強し度いつもりだんね、身体も兄をまかすてんな、もうあゝして家に居てくれたならなあ、何にも云ふ事おめへんけれど……思ふ様にならんもんだつ

せ』

『ほんまになあ、私とこらでもあないして弟の方は大阪で役所に出て、まあ自分だけやつて行きますしほん高等の二年迄やつた、の丈けやけど、まあ些と自分で法律とか何やら云ふもんしてんねんそうやけど、なああの兄貴の方はどむなりめへん、大阪へ行く云ふた時でも喧し云ふて止めてんけどな……へえ今長崎とか云ふ所に行てまんね、なあじつとして百姓してたら何も云ふ来あれへんのに……』

『さうだんな、もう五六年になりまんな、未だ一ぺんも帰りはらずだんな』

『へえ、今度は帰る今度は帰ると云ふて、些とも帰しれめくんね……へえ石炭の何とかしてまんねんて、何してるや分れしめへん、一ぺん行たらかしらん思てまんねけどなあ、何や三百里もおまんねて……ほんまにななけりやならんもんだつけど、苦の種だんなあ』

『ほんまになあ』

(明治43年5月1日 10巻10号)

選者は(もつと深いバックの見える会話を聞きたいものだ、たゞ上中に写したただけでは駄眼だ。)と評しているが、当時の宇野の生活に照らしてみると、勉強ばかりしている我が子への不満を語る母親の姿が描けていると思う。

以上が確認された宇野の投稿作品のすべてであるが、初めに書いたとおりまだ未確認の作品があると思われる。しかしおそらく早稲田大学進学を気に投稿を止めたのではないかと想像される。そこから次の《夢見る清二郎》の世界が開けてくるのだろう。

(平成十七年九月十五日受理)